

# 栃木県農業試験場いちご研究所 ニュースレター 第4号

## ＜本号の内容＞

- トピックス：いちごの収穫量は50年連続、作付面積は17年連続で日本一
- 生産・流通・消費：いちご収穫量50年連続日本一の歴史（1）
- 試験研究：「とちおとめ」の経営に「スカイベリー」を導入した生産者の経営的課題
- いちごの“そうか!”：いちごのランナー？



いちご研究所では、研究成果や生産・流通などに関する情報を皆様に分かりやすくお伝えするため、「いちご研究所ニュースレター」を発行しています。

今号は、平成29年産いちごの収穫量・作付面積やいちご収穫量50年連続日本一の歴史について紹介します。

## トピックス：いちご収穫量は50年連続、作付面積は17年連続で日本一

農林水産省の作況調査（野菜）で平成29年産いちごの収穫量、作付面積等について、調査結果の第1報が公表されました。

栃木県のいちご収穫量は、25,100tで全国の収穫量の約15%を占め、昭和43年産から平成29年産の間50年連続日本一となっています（図1）。作付面積は、554haで全国の約10%を栃木県が占め、平成13年産から17年連続日本一となっています（図2）。栃木県の作付面積554haは、東京ドームに換算すると約118個分となります（東京ドームの面積は46,755m<sup>2</sup>）。

なお、昭和50年産以降の主産県のいちごの収穫量、作付面積の推移は農業試験場いちご研究所のホームページに掲載してありますので、ご覧ください。

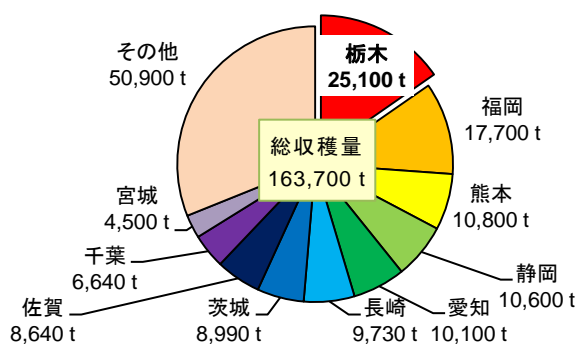


図1 都道府県別いちご収穫量  
(農林水産統計 平成29年産)

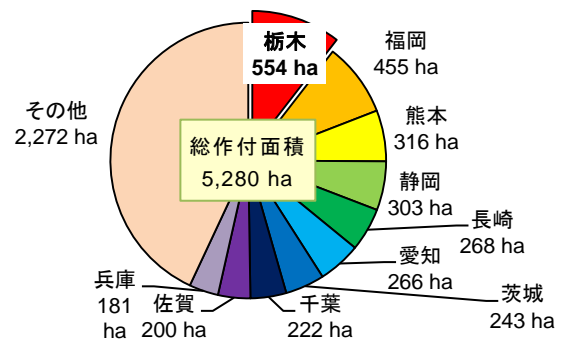


図2 都道府県別いちご作付面積  
(農林水産統計 平成29年産)

# 生産・流通・消費:いちご収穫量 50年連続日本一の歴史(1)

農林水産省の統計で、本県がいちごの収穫量 50年連続日本一となったことから、これまでの栃木のいちご栽培の歴史について、今号と次号にわたり紹介します。

## 1 いちご栽培の始まり(昭和 20~30 年代)

昭和 20 年代、麦類の統制廃止\*や大麻価格の下落などを背景に、収益性が高く水稻の裏作として栽培できるいちごの栽培が始まりました。昭和 27 年に、宇都宮市姿川地区と御厨町(現足利市)で集団栽培されたのが産地の始まりとされています(写真 1、2)。

昭和 30 年代になると、いちごの栽培は急速に広がり、昭和 39 年には現在とほぼ同じ 600 ha の栽培面積となりました(図 3)。



写真 1 露地栽培



写真 2 トンネル栽培

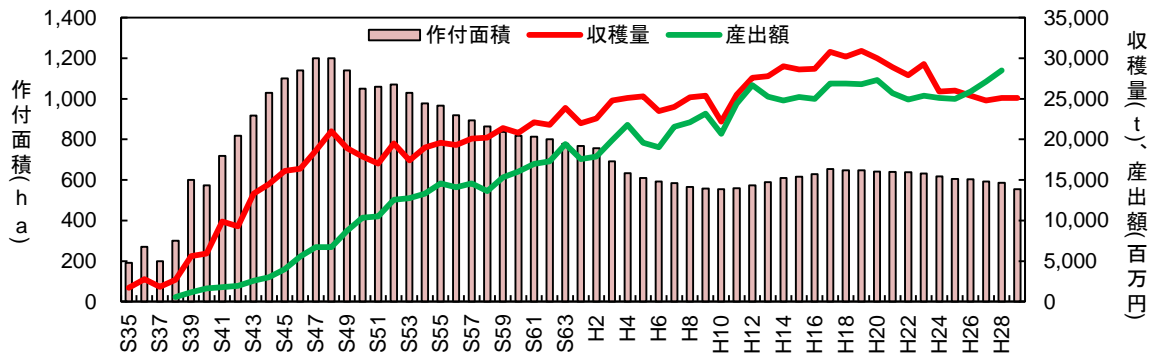


図 3 生産状況の推移 (農林水産統計)

## 2 早出しへの挑戦(昭和 40 年代)

昭和 40 年代前半には、「株冷蔵」や「高冷地育苗」などの低温処理による休眠打破技術が開発され、それまで 5~6 月に出荷されていたいちごが、2 月に出荷できるようになりました(写真 3、4)。

昭和 47 年には、最大面積 1,200 ha に達し、県西部の大麻等の産地、県南部の耕作規模の小さい地帯、県東部の水田地帯に大きな産地が形成され、大麻や麦類に代わる有利な作物として定着しました(図 3)。

\*米や麦などの主要食糧の需給、価格を政府が管理する制度で、生産者からの買入、消費者への配給、価格等が政府の統制下にありました。



写真3 大型冷蔵庫を利用した株冷蔵



写真4 高冷地育苗（日光市戦場ヶ原）

### 3 産地を支える無病苗増殖基地・省エネルギー生産（昭和50年代）

昭和50年、病害に汚染された苗の蔓延を防ぐため、県内10か所に、いちごを侵す病原性ウイルスに感染していない苗を供給する「無病苗増殖基地」が整備され、良質苗の一元的な安定供給体制が確立されました。

2回にわたるオイルショックを経て、省エネルギー生産が求められるようになり、単棟ハウスを中心に、地下水をハウス内の天井部から内貼りカーテンに散水し、ハウス内を保温する「ウォーターカーテン」が開発され、急速に普及しました（写真5）。



写真5 ウォーターカーテン

（参考：栃木いちごの歩み）

## 試験研究：「とちおとめ」の経営に「スカイベリー」を導入した生産者の経営的課題

いちご「スカイベリー」と「とちおとめ」の2品種を導入した場合には、育苗や定植後の栽培管理作業よりも、収穫やパック詰めなどの収穫調整作業の煩雑さや大変さが課題となっていることが明らかとなりました(図4)。

特に収穫作業やパック詰め作業を行う作業者が限定されることで、新品種の導入が抑制される傾向が認められ、経営体を構成する全作業者が各作業に携われる体制が必要と考えられました(図5)。

なお、調査は、①当初は「スカイベリー」の導入が進まなかったが、現在は増加傾向の部会A、②当初から導入が進み現在も導入率が高い部会B、③当初は導入が進んだが現在は縮小傾向の部会C、を対象に行いました。



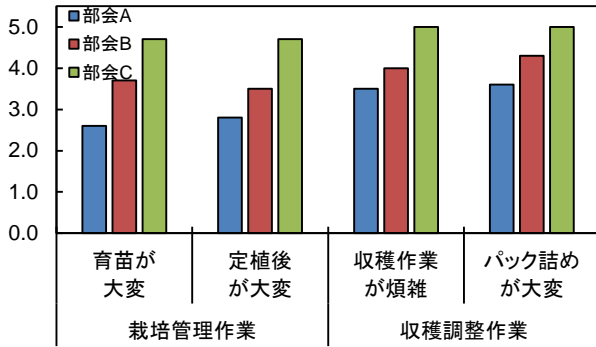


図4 「スカイベリー」導入生産者がイメージする2品種導入時の課題

※5段階評価（5：あてはまる、4：まあまああてはまる、3：どちらともいえない、2：あまり思わない、1：あてはまらない）の平均

（農業試験場研究成果集第36号 平成30年）

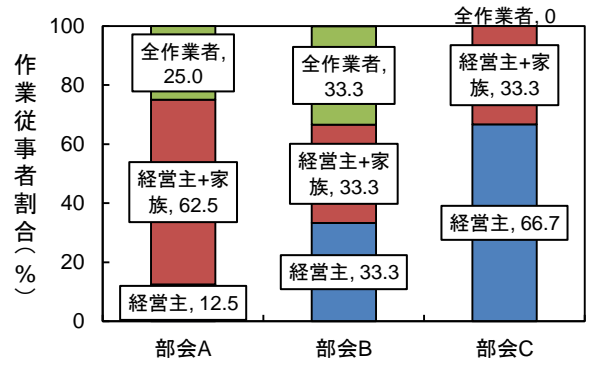


図5 生産部会別のパック詰め作業従事者割合

※全作業員は、経営主+家族+被雇用者

（農業試験場研究成果集第36号 平成30年）

### いちごの“そうか！”:いちごのランナー？

そう果<sup>※</sup>(果実表面のツブツブ)を播種して生育させると「多様性を示すように、「そうか！」と思えるような様々な豆知識等」を紹介します



いちごは春になるとランナーと呼ばれるつるを伸ばすよ。ランナーの先端には子苗ができて、その子苗からまたランナーを伸ばして、先端に次の子苗ができて…、次から次に子苗を増やしていくんだ(写真6)。いちごは、この性質を利用して、種ではなくて子苗で増やして育てていくよ。

ちなみに、1つの親苗からは、30本程度の子苗をとることができるんだ。



写真6 空中採苗方式による子苗の増殖

